

版社、一九八八)。

ところで両氏はトルファン本の寸法を、黒田源次氏の報告(普魯西学士院所蔵中央亜細亜出土医方書四種)、『支那学』七巻四号、一九三五)に依拠している。しかし、いまベルリン国家図書館所蔵のトルファン本でみると、黒田氏が報告した寸法には明らかな誤認がある。そこで正確な寸法と文字量から計算しなおすと、トルファン本は三巻本の一部である可能性が高いと判断された。

偶然が重なっているとはいえ、中国をはさんだ東西から三巻本『本草集注』の史料が出土していることは、まことに興味深い現象といえよう。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史学研究所)

4

『活幼口議』の著者について

王 鉄策・真柳 誠・小曾戸 洋

演山省翁の『活幼口議』は医論を交えた特色のある小児科書で、中国医学小児科の発展史上、少なからざる意義を有するものである。しかし本書に適切な史的評価を与えるには、成立年代・著者の確定とその背景の正確な認識が不可欠である。かつて多紀元胤は本書の著者を元代の曾世栄に当てた。これ以来、日本でも中国でも元胤の説が踏襲されてきたが、演者の検討によれば、元胤の説は正鵠をえないと考えられる。

本書の著者・演山省翁の伝は史書になく、本書名も正史に記載がない。最初に本書を記録した目録は明代の『国史経籍志』(一六〇二年)で、その後、『内閣書目』『医蔵書目』などもこれを記載する。ただし著者として演山省翁

の名を記載するのみで、いずれも曾世栄とは記さない。

曾世栄は元代の医家で、衡州府(湖南衡陽)に住み、伝は明代と清代の『衡陽府(県)志』に記載されている。曾世栄の字は徳頤、号を育溪といい、著書に『活幼心書』がある。そこで演者は『活幼口議』(以下『口議』と略)と『活幼心書』(以下『心書』と略)を比較検討してみたところ、かなりの相違点を認めた。例えば『口議』は金銀薄荷湯を多用するが、『心書』では金銀薄荷を金錢薄荷の誤写と指摘する。他方、『口議』は指紋診法をしばしば記すが、『心書』は一度もこれに言及しない。つまり両書は學術体系を異にしていると判断される。さらに『口議』に記載された薬方・診断・治療法についてみると、宋代のもの为主である。すなわち太医局の処方、銭乙・漢東王氏・張渙・『幼幼新書』などを引用している。しかも演山は張渙の薬方(『小児医方妙選』)が最近流行している(『直齋書録解題』によれば一一二六年頃)といい、『幼々新書』が最近編集(一一五〇年初刊)されたことも記している。したがって『口議』の成立は以上の両書に近い一一〇〇年代後半と考えられる。とすれば演山省翁は南宋の人で

あり、元代の曾世栄ではありえない。

演者はさらに演山の手がかりを求めべく文献を渉猟したところ、清代・江蘇の沈金鰲『幼科積謎』に多くの「史演方」が引用されていることに気がついた。まさにこの史演山こそ『口議』の作者ではないだろうか。「演推衍」と「省(体悟)」との意味の相似からすれば、演山は名、省は字となり、これは当時の中国人の名・字の関係と合致する。史の姓については『路史』に、「倉頡の後に史氏があり、宣城(安徽省)・武昌(湖北省)にて声望が高い」と記載されている(『中国人名大辞典』姓氏考略)。さらに『口議』巻首には、「私の家系は代々江南に居る」と書かれている。宋代には江南東路・西路が置かれ、今の江蘇・安徽両省を支配していた。しかも『口議』に記される「一腊」「扎脚」「巴鼻」「声鞞」などの用語は、いずれも宋代の江蘇・浙江の方言である(『夢梁録』育子、『輟耕錄』纏足、『委巷叢談』『通俗編』品目・鞞)。ちなみに『口議』を引用する『永類鈴方』の著者李仲南、『幼科証治準繩』の著者・王肯堂など、多くの医家も安徽・江蘇・浙江一帯の人である。

以上の検討結果、『口議』の著者・演山省翁は元代の曾世榮ではなく、宋代の史演山(字は省)であり、出身は江南であると判断するに到った。さらに本書の内容から、小児科医師は家伝、道家の学を兼ね、活動地域は主に安徽・江蘇・浙江省あたりと推定できる。演山は小児驚風痰熱の治療に長じ、病証・方薬・診療・調養などの論説は後世の医家に重視された。

多紀元胤の誤認に基づく『活幼口議』の著者に関する従来の通説は、改められるべきであろう。

(黒竜江中医学院医史教研室、北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史学研究所)

5 仏典と『スシュルタ本集』に みられる看護

杉田暉道

仏教では病人の看護は、出家僧の修行の中でとくに重視されているが、インドの伝統医学であるアーユルヴェーダではどのように扱われているかを比較検討した。仏典では『摩訶僧祇律』卷二八(『国訳一切経』律部一〇、八七五―八七六頁)を、アーユルヴェーダでは『スシュルタ本集』(大地原誠玄訳『スシュルタ本集』第一編総説篇、第一九章)を用いた。

先ず『摩訶僧祇律』について三種の病人の内容をみると、飲食、薬物、看病の三つの条件によって病人の転帰は異ると述べているが、三つの条件の中で看病をもっとも重視している。さらによい看病を行うには命を捨てる気持で行わねばならない。よい看病を行うと大きな功德